

◆最優秀賞◆

栃木県立宇都宮北高等学校 2年 小玉 伊織 さん

『斜陽』（太宰治／著 新潮社）

高貴なるお母様、もうどうすることも出来ないのね。私は落ちて、落ちて、落ちてゆく。

*審査員講評

たった 40 字でシンプルな文章なのに、すっきりとまとまっていて和の美しさを感じられ、心にささる魅力的な作品でした。この2文に引きつけられて、『斜陽』を読みたいくなります。言葉のセンスが素晴らしく、インパクト抜群で驚きました。

【受賞者コメント】

実を言うと、今まで私はそれほど本が好きというわけではありませんでした。ただ、中学生の時に読んだ『斜陽』の一部が記憶に残っていて、高校生になって読み返すと、太宰治の言葉遣いにぐっとくるところがあったのです。

このコンテストをとおして、もっと様々な本と出会いたいと思うようになりました。ありがとうございました。



◆優秀賞◆

- ・栃木県立宇都宮北高等学校 2年 林 之湖 さん

『ストーリー・セラー』（有川浩／著 幻冬舎）

「命を削って思考する」

文字通り考え続けると死んでしまう病にかかった女性は、愛する者のために小説を書くことをやめなかった。胸がぎゅうと締めつけられて、苦しい程切ない。けどその中には彼らの愛があふれていた。

* 審査員講評

目を引く書き出しに、まずグッと心をつかまれます。擬音語の使い方も絶妙で、この本への思いが伝わってきました。『ストーリー・セラー』という小説の設定の面白さが作品に凝縮されていて、このあと二人がどうなっていくのか、とても気になりました。

- ・栃木県立宇都宮北高等学校 1年 安藤 美優 さん

『記憶屋』（織守きょうや／著 KADOKAWA）

「あの、誰ですか」あなたがいきなりこの言葉を友人にかけられたらどう思うだろうか。大学生の遼一は記憶屋によって先輩・杏子の記憶から消されてしまう。忘れたい記憶を消してくれる記憶屋。一見、いい人に思えるかもしれない。しかし、抱く感情は恐怖。本当に記憶を消すことは良いことなのだろうか。

* 審査員講評

「本当に記憶を消すことはよいことなのだろうか。」この一文が、色んなことを考えさせてくれました。だからこそ、この本を実際に読んで、自分は思うか知りたいと思いました。

- ・栃木県立宇都宮北高等学校 1年 半井 謙汰 さん

『宇宙への秘密の鍵』（ルーシー&スティーヴン・ホーキング／著 岩崎書店）

「カタカタ」「ワタシハ…」誰もいないはずの隣の家から最近不思議な音がきこえる。好奇心旺盛な男の子ジョージは勇気を出して扉をくぐる。「あんた、だれ」現れたのはブロンドの髪の女の子だった。後にこの出会いは宇宙へと繋がる運命的な出会いだったと知ることになる。ここから始まる宇宙への旅。

* 審査員講評

「この本読んでみたい！」という感情をダイレクトに刺激する作品だと思いました。本の内容を想像させてくれる文章で、続きがとても気になります。また、『宇宙の旅』と締めるラストが印象的でした。

令和3年度「伝えよう！本の魅力コンテスト」ツイッター部門 受賞者・受賞作一覧

・栃木県立栃木高等学校 1年 大川 貴久 さん

『クビキリサイクル』（西尾維新／著 講談社）

絶海の孤島、集められた天才達。次々と発生していく殺人事件を追うのは、占い師でもなく学者でもない、何の才能も持たない「ぼく」だった……。話が進むにつれて明かされていく真相。どれが真実でどれが嘘なのか、それともただの「戯言」なのか。最後に告げられる結末には読者全員が息をのむはずだ。

* 審査員講評

なぜ『ぼく』が事件を追うことになったのか、『ぼく』は真実にたどりつけるのか、話の展開が読めず、結末がとても気になりました。短文をたたみかけることで読みたい気持ちをかき立てられるし、三点リーダーの使い方も上手です。ミステリー好きにとっても気になる作品でした。

・栃木県立壬生高等学校 3年 南雲 依芙紀 さん

『氷菓』（米澤穂信／著 KADOKAWA）

「わたし、気になります」

日常に潜んでいる小さな謎解きから始まった折木奉太郎の日常は、好奇心の申し子、千反田えるによる一言に巻き込まれるようにして変化していく。きっとこれを読んだ君は、今までとは一味違う日々を送れることだろう。爽やかで、少しほろ苦い青春ミステリーはこの本だけだ。

* 審査員講評

最初の引用が本の帯に書いてあったら、迷わず手に取ってしまうほど魅力的な構成です。このフレーズが主人公や話の展開にどう影響するのか、気になりました。「千反田える」の好奇心が読み手の好奇心をもくすぐり、読んだことがあっても再度読み返したくなる力があります。